

福岡女学院大学

福岡女学院資料室での
聞き取り調査報告

各地のアーカイヴズ訪問調査として、今回は二〇一八年八月三十一日に福岡女学院資料室において聞き取り調査を行った。調査には福岡女学院資料室の専任教員である井上美香子講師にご協力いただいた。本調査を担当したのは、本学建学史料室研究員の富岡勝と酒勾康裕、同室職員の木村道子（調査当時）、報告者の四名である。調査内容は書庫及び展示室見学、福岡女学院資料室の組織形態や活動内容、史料収集と保管などを中心に、その他の事項については聞き取りの中で随時質問するという方法で行った。

今回訪問した福岡女学院資料室の開設の経緯は次のようになっていた。福岡女学院大学では、学院の記録のために年史を五年ごとに作成しており、その年史編纂に使用した資料を保管する「資料室」が存在し、その管理を総務課が担当していた。この「資料室」と呼ばれる場所がいつから存在し、置かれるようになったのかの詳細はよく分からないということであった。そして、二〇一四年二月に一二五周年記念館が竣工し、同年五月十七日に記念館六階へ資料室及び展示室を開設する。翌六月に「福岡女学院資料室規程」が制定され福岡女学院資料室が設置される。その後、二〇一七年四月より、二〇三五

年に迎える創立一五〇年に向けた『二五〇年史』の編纂と刊行を目指し、専任教員を配置して福岡女学院資料室の本格的な整備に着手して現在に至る。

福岡女学院資料室の運営については、資料室の事業を進めるための運営委員会を二〇一五年に立ち上げている。運営委員会は、院長、各専任教員、事務局長、各大学教員一名、高校および中学教員一名、資料室教員一名、事務職員若干名にて構成されている。また、院長特別顧問を置き、資料室の運営及び実務についての指導と助言を受けながらアーカイヴズの構築に向けた作業を進めているそうである。そして、院長は他大学において年史編纂の経験があるために、組織体制作りにおいてもその知見が反映されているとのことであった。資料室の室員は、設置当初から二〇一六年度までは非常勤事務職員一名のみであったが、二〇一七年度以降は専任教員一名と非常勤事務職員一名の二名の体制となり現在に至っている。

資料室の目的は「福岡女学院の歴史及び伝統を後世に継承するために学院史に関する資料の収集、保存、調査、研究等を行い、本学院の発展に寄与すること」とされている。業務として、資料の整理・収集・目録・公開、一五〇年史編纂業務、教育、その他の学内業務・連携などを行っている。まず、資料の整理については、井上氏が着任した二〇一七年四月時点で、資料室の書庫や事務室に

は三十数年間の資料が段ボール箱に入った状態で山積みされていたのである。そのために、書庫を活用できるように既存の資料群を評価・選別しつつ、新たな資料を保管・配架できるように内装設備の整備から着手したそうである。また、キャビネットに保管されたままの多くの資料を学校種別、時代別に分類し直す作業も同時に進めていったということであった。一方、学内の所蔵資料に関する調査は、今後実施する予定であり、各部署に散在している資料の所在などを資料室で把握することを目的に行うそうである。これは、現在の資料室の収納スペースが限られていることもあり、保存の対象となるすべての資料を資料室に移管するためではなく、その限られた空間を有効に活用して資料の保存・管理を進めるためとの説明があった。

次に、資料の収集は、同窓会や退職者の会などを通じた資料提供依頼に加えて、月一回行っている「福岡女学院を語る会」における同窓生や元教職員との座談会形式での聞き取り調査を行っており、さらに同窓生や元教職員の高齢化を踏まえてオンラインヒストリーを実施するそうである。そして、資料の公開については、資料室と同じフロアにある展示室の整備や展示内容の企画、福岡女学院の代名詞であるセーラー服や学院の歴史などに関する資料の展示、研究や報道取材に関する資料閲覧業務などの対応を行っている。特に、展示

室における展示内容については、自校史教育的な側面と広報的な側面を含むものであり、見学目的や年齢層も異なる見学者に対して考慮する必要があるため、今後は広報校友課と連携しながら展示内容の検討を進めるそうである。また、オープンキャンパスなどの学校行事に際しては展示室を開放し、室員が展示内容の説明や案内を担当しているということであった。

教育に関する業務として、福岡女学院を構成する中学校、高等学校、短期大学、大学において使用する学院史の教育用教材作成の支援を行っており、現在DVD映像資料の作成を鋭意進めている状況となっている。ただし、教科目としての自校史教育は未設置とのことであった。そのため、各学校での授業やゼミの際に展示室を活用してもらえようように支援を行っているそうである。活用を促すために、この一年ほどの間に最初は教員への声かけから始めて、現在では展示室の利用が徐々に広まりつつある状況になっているそうである。

最後に一五〇年史編纂業務について、前述のように福岡女学院資料室は二〇一七年四月より専任教員を迎えて本格的な整備に着手したため、アーカイヴズの構築も年史編纂業務も始まったばかりである。これまで五年ごとに刊行された年史は、中学校・高校・短大の教員を中心に、五〇年史をもとに新たな事蹟を写真で解説する内容で編集を行ってきたそうである。

近畿大学を巡る史資料
—二種類の『学報』— 11

教職教育部教授

建学史料室研究員 富岡 勝

ある。二〇一八年には一三〇年史の編集を進め、一三〇年史刊行後は五年ごとの刊行スケジュールの見直しを行い、次の年史刊行は一五〇年史の予定であるとの説明があった。一五〇年史編纂にあたっては、現在書庫内にある資料の整理と学内資料に関する一斉調査の実施による基礎資料の整理と収集を当面こなすべき第一の課題としている。学内調査の終了後に、年史編纂のための委員会の設置を検討する予定であると説明された。また、同時に学院年表や『学院時報』の記事索引の作成にも着手するということであった。今後は資料の目録化を進め、年史の目次を作成し、執筆者へ資料を提供できるように作業を進めていくそうである。

井上氏は、私立学校を取り巻く諸々の厳しい状況の中で、学生の教育のための組織ではないアーカイヴズの必要性についての理解はなかなか難しいと語っていた。この中で、アーカイヴズの整備・充実を目指した福岡女学院資料室の取り組みは注目値するものであると立ち上げを任せられた井上氏は話してくれた。これらの福岡女学院資料室の資料収集や保管に関する取り組みや資料展示などの工夫は我々の参考になると思われる。

(九州短期大学教授
建学史料室研究員 三木 一司)

令和元(二〇一九)年に創立三十周年を迎えた教職教育部の年表をつくる作業に取り組んだ(詳細は『近畿大学教員論叢』第三十巻第一号に「教職教育部30年史略年表作成の試み」として掲載予定)。

この作業には主として部内の会議資料や紀要を活用したが、同時に、教職教育部の設置、関係する学内規則、人事発令などの基本的な事実を確認する上で、『学報』が欠かせない存在であることを痛感した。

ところで、年表をつくるまで筆者も明確には認識していなかったことだが、この『学報』には、次のように二種類存在している。

一種類目の『学報』は、昭和四〇(一九六五)年九月一日に『近畿大学学内報』の名称で総務部総務課の編集・発行で創刊され、平成二(一九九〇)年九月二十日発行の第二三二号で『近畿大学学報』(広報・出版課の編集発行)と改称されて現在も発行されている。令和元年十月一日までに通算で五三八号が発行されている。本稿ではこれを便宜上「学報一」と呼んでおきたい。

二種類目の『学報』は、昭和三十(一九六〇)年十月一日に近畿大

学学報局によって『近畿大学学報』として創刊され、平成二(一九九〇)年八月一日発行の第三三四号で『近畿大学学内報』(近畿大学広報・出版課から発行)と改称され、平成十七年四月一日の通算四五四号まで刊行された。これを「学報二」と呼んでおく。

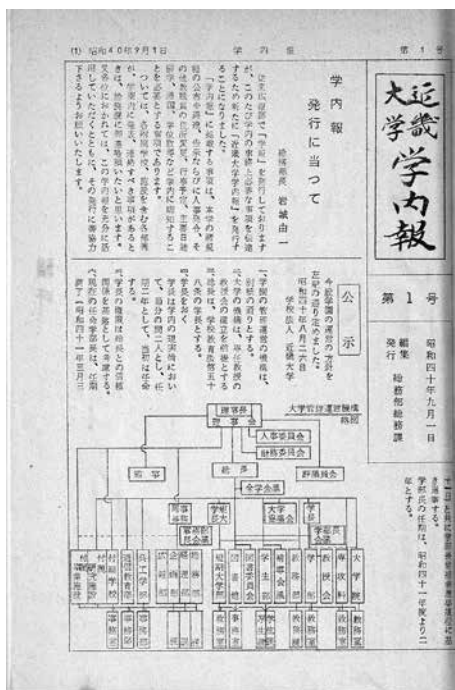
あえて単純に整理すれば、『近畿大学学内報』として創刊された『学報一』は、学内規則や人事異動などの正式連絡の場として役目をもったいわば官報のような存在で、『学報二』は『近畿大学学内報』と改称したことから分かるように、学内の様々な動きを伝えることで教職員の認識共有をはかることが主な役割であったといえるだろう。

以下、この二種類の『学報』について、刊行目的や掲載事項などを紹介したい。(原典尊重の観点から、史料に一部不適切と思われる表現が見受けられるが、原文のままとした。)

【学報一】(『近畿大学学内報』→『近畿大学学報』)
昭和四〇(一九六五)年九月一日に発刊された『近畿大学学内報』創刊号巻頭に総務部長岩城由一「後の理事・事務総局長筆者注」による「学内報発行に当たって」が掲載されている。このなかで、刊行目的が次のように述べられている。

従来広報部で「学報」を発行しておりますが、このたび学内の事務上必要な事項を伝達するために新たに『近畿大学学内報』を発行することになりました。

「学内報」に掲載する事項は、本学の諸規程の公布や通達、告示ならびに人事発令、その他教職員の住所変更、行事予定、主要日誌、留学、帰国、学位取得など学内に周知することを必要とする事項であります。



『近畿大学学内報』第1号